

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

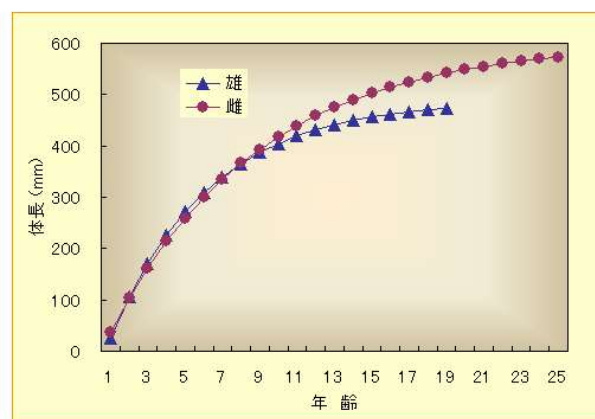
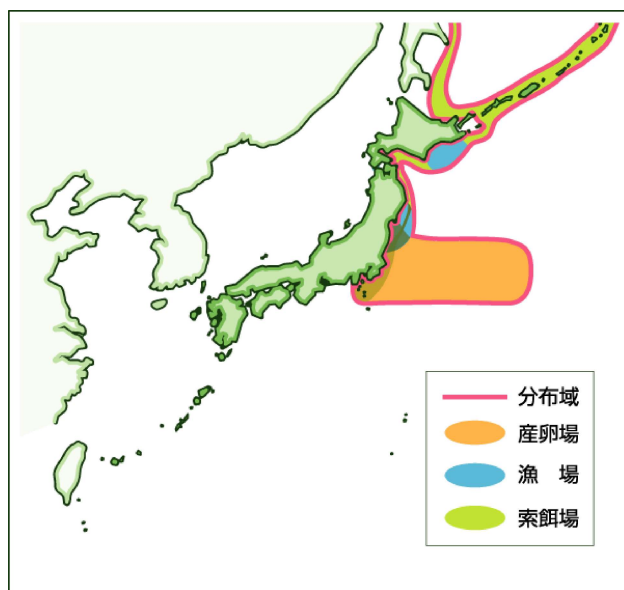
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 24歳以上
- 成熟開始年齢： 雄5歳、雌7歳以上
- 産卵期・産卵場： 2～4月、本州関東・東南北部沿岸から本州東方の外洋域
- 索餌期・索餌場： 周年、東北太平洋海域以北の陸棚斜面域（水深300～1500 m）
- 食性： オキアミ類や橈脚類などの甲殻類およびハダカイワシ科魚類など
- 捕食者： ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラ、ツチクジラなどの海産哺乳類



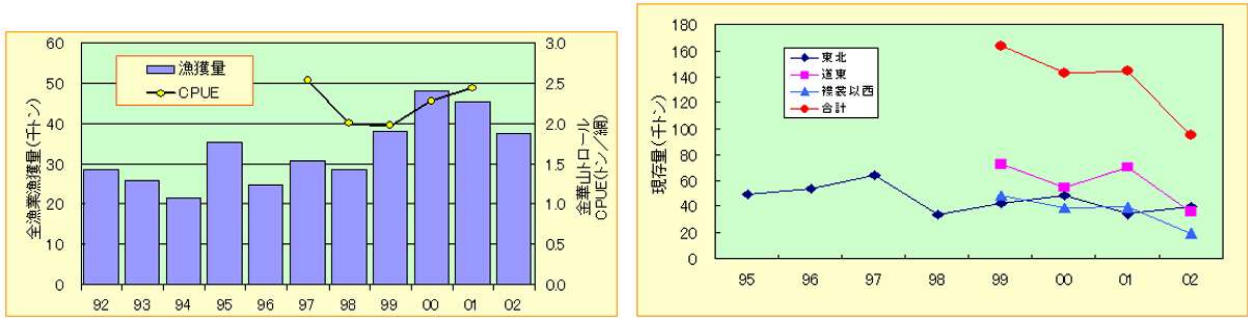
漁業の特徴

1990年代以降に専門に狙われ始めた資源で、主に沖合底びき網によって漁獲され、道東では釧路、東北では石巻に水揚げされている。練り製品の原料としてスケトウダラの代替として使われており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。また、ロシアに対し日本水域内において漁獲が割り当てられている。

漁獲の動向

近年の日ロ両国漁船による漁獲量は1992年が28千トン、1993年が24千トン、1994年が20千トンと徐々に減少した。その後増加し、1995年には35千トンとなり、2000年には48千トンと過去最高を記録した。その後再び減少し、2001年には45千トン、2002年には37千トンになっている。しかし、これらの変動は資源量水準の増加・減少を直に反

映しているのではなく、他魚種の漁獲状況やロシアによる漁獲量の変動による影響が大きい。



資源評価法

東北および北海道太平洋海域の陸棚斜面域において、主な分布水深帯である水深350～900mで実施した着底トロール調査の結果を基に、面積―密度法により現存量を算出した。東北海域では過去8年、道東海域では過去4年における現存量の推移から変化率を求め、2001年の漁獲量に変化率を乗じてABCを算定した。

資源状態

東北海域における1995年以降の現存量は、33千～64千トンの範囲で増減を繰り返している。一方、1999年以降の道東海域では36千～72千トンの範囲内である。どちらの海域でも減少していることから資源は減少傾向であると考えられる。また、現在の道東海域の調査は1999～2002年に行われているが、ちょうど10年前の1989～1992年にも行われている。過去と現在のイトヒキダラの分布密度を比較すると、現在のイトヒキダラの密度は1989～1992年の半分以下であった。1989～1992年は本格的に漁業が始まった時期なので、その時期の資源は非常に高い水準と考えると、現在の資源水準は中程度であると考えられる。



管理方策

漁獲の中心は成魚である。長寿で、成熟開始年齢が遅い本種の生態特性も併せて考えると、親魚量を維持するように資源を管理することが重要である。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	37千トン	0.81Ccurrent	-	-
A B C target	29千トン	0.8ABC limit	-	-

資源評価のまとめ

- 東北海域および道東海域の資源は減少傾向にあり、特にその傾向は道東海域で顕著
- 資源水準は中位である
- 加入量は年変動が大きく不安定

資源管理方策のまとめ

- 成長が遅く、比較的長寿であるため、親魚量を維持する必要がある
 - 加入量の年変動が大きく、資源は卓越年級の発生により支えられているため、若齢魚を含めた今後の資源動向に注意が必要
-

資源評価は毎年更新されます。